

問9	問8	問7	問6	問5	問4	問3	問2	問1
<p>不要なもののない竹間素な日常空間の中で、必要最小限のものを置いて、そのものの魅力を味わい楽しむ暮らし方。</p>	<p>ものに託された暮らしの豊かさを成就するためには使い込むことが大事な点。そのための場所を持つという点。</p>	<p>テーブルがひとつあれば、ガラスは途端に魅力を増す。</p>	<p>所有に頼らない豊かさに気がき、ものを買わないことにより主体性を持つこと。</p>	<p>ものを捨てる時よりもむしろ、無駄に大量生産する時にこそ「もったいない」と考えるべきである上に、不要なものを溜め込むことは決して快適ではないから。</p>	<p>③ C</p> <p>⑥ a</p> <p>⑦ b</p>	<p>豊かさや充足感を感じようになつたから。</p>	<p>何もないという簡潔さこそ高い精神性や豊かたイメージネーションを育むものだし、最小限のもので暮らすという特性。</p>	<p>ア 達観</p> <p>イ 採掘</p> <p>ウ おな</p> <p>エ 切実</p> <p>オらいさん</p>

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8
① 刑部卿敦兼 ② 北の方	③ はたから見て気の毒な	⑤ 助詞	北の方が五節の舞で様々な美しい人を見るにつけ、自分の夫のみにくさが際立ち、夫の顔も見たくなくなったこと。	夜が更けて月の光や風の音が身にしみたくて、女房達を味方にし薄情な仕打ちとする北の方の態度がいつより辛く感じられたということ。	ませ垣の内に生えた菊の花が色褪せ枯れてゆくように、自分が通い夫婦となった北の方が心変わりして自分から離れてしまったということ。	それからは特に夫婦仲がすばらしくよくなったとか、そういうことである。	夫が北の方への思いを技巧を凝らした歌に託して詠んだりを聞き、感動して夫への態度を改めるほどに、北の方が歌の情趣に通っていたこと。
	⑦ 色褪せる(心変わりする)	⑨ 完了の助動詞「ぬ」連用形					